

## 京都大学瀬戸臨海実験所構内で冬季に咲いたタカサゴユリとハマダイコン Winter bloom of *Lilium formosanum* and *Raphanus sativus* in the campus of Seto Marine Biological Laboratory, Kyoto University

久保田 信\*・梅本信也\*\* Kubota, Shin\* & Umemoto, Shinya\*\*

\*京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所（〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町 459）

\*\*京都大学フィールド科学教育研究センター紀伊大島実験所（〒649-3632 和歌山県東牟婁郡串本町須江）

### はじめに

和歌山県西牟婁郡白浜町に位置する京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所は面積が4万630㎡あり、4門7綱109科278属340種の植物が記録されている（檜山ほか，2002）。夜温が10℃以下になった2012年12月下旬に、ユリ科とアブラナ科の夏生草本植物が構内にて不時開花したので記録しておく。

### 結果と考察

島を除く京都大学瀬戸臨海実験所構内に、冬季、2種とも1個体ずつ生育し、ともに草高が約90cmであった。ユリ科タカサゴユリ *Lilium formosanum* Wallace は3花が開花した。2012年12月17日にこの存在に気づいた時は2花が開花しており（図1）、1花はまだ蕾だった。同年12月23日には開花していた1花は雌蕊だけとなり、他方、蕾は開花した。その翌日の12月24日には1花だけとなって、翌年の2013年1月3日には全ての花が雌蕊だけを残した。タカサゴユリの花の寿命は短い。この後は、一つの花に未熟種子ができたのみで（図2）、2花とも2013年5月13日に種子をつくらず枯死した。



図1. 四季咲き化と推察されるタカサゴユリ *Lilium formosanum* Wallace (2012年12月17日撮影)



図2. 未熟種子が実ったタカサゴユリの一つの花 (2013年4月9日撮影)

一方、アブラナ科ハマダイコン *Raphanus sativus* L. var. *raphanistroides* Makino は、2012年12月24日に多数（数十花）が開花していた（図3）。2013年1月7日になっても同様の状態であり、花は寿命が長いといえる。少なくとも少数だが結実が見られた（図4）。しかし、このすぐ後で手折られてしまい、継続観察不能となった。

乾燥状態でもこの個体の根元の茎は太く（図5）、そこから数十もの細い茎が出ていた。このことは親個体が寿命を超えて1年以上生きてきたと推察される。

実験所構内では、例年、タカサゴユリは夏に、ハマダイコンは春（3月末頃から構内では咲き始め、稀に少数が秋まで）に咲いている。これら2種の今回の季節外れの開花の理由は、タカサゴユリでは突然変異や近縁の栽培品種からの遺伝子流動、さらに温暖化が原因で四季咲き化したと推察される。タカサゴユリでのこのような現象は前世紀末から串本町でも時折見られるようになり、2007年に串本町紀伊大

島での事例が新聞で報道された（紀伊民報, 2007）。一方、ハマダイコンでの不時開花の原因は不明であるが、草本に囲まれた日当たりのよい空き地に生育している環境が影響したのかもしれない。



図3. 不時開花したハマダイコン *Raphanus sativus* L. var. *raphanistroides* Makino (2012年12月24日撮影)



図4. 不時開花したハマダイコン *Raphanus sativus* L. var. *raphanistroides* Makino の実 (2013年1月17日撮影)

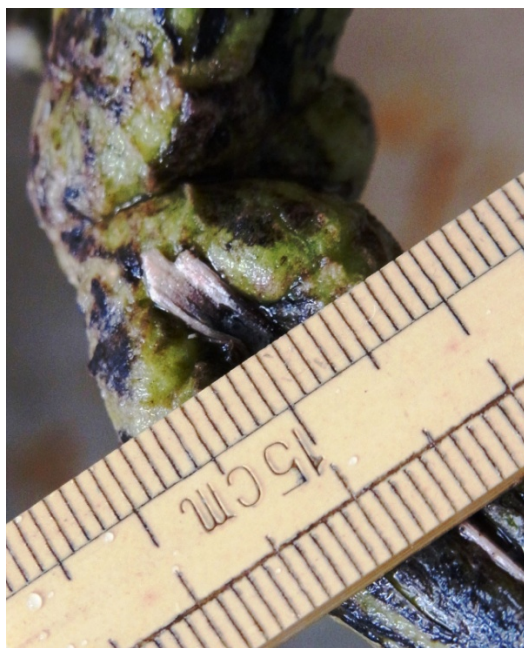


図5. 不時開花したハマダイコン *Raphanus sativus* L. var. *raphanistroides* Makino の根元の太い茎 (2012年1月17日撮影)

#### 引用文献

- 樫山 嘉郎, 久保田 信, 白山 義久, 梅本 信也.  
2002. 瀬戸臨海実験所構内植物リスト  
(1962-2002). 瀬戸臨海実験所年報, 15:  
30-37.
- 紀伊民報 2007. 季節外れのタカサゴユリ. 3月31日付.